



代表取締役会長の浦信夫氏(左)と代表取締役社長の明子氏(右)が手にしているのは、近赤外光を利用したマグロの脂肪含量測定装置「PiPiTORO」

光分析技術を活かした多彩な機器を開発

相馬光学は、光分析・分光技術を核とする企業だ。代表取締役会長を務める浦信夫氏が1976年に創業し、当初から分光測定器の設計などを手がけていたが、89年に液体中の成分を分析するために不可欠な「高速液体クロマトグラフ装置」を自社開発してメーカーへと脱皮。現在はさまざまな光学機器や分析機器を開発しており、特に近年では、食肉に近赤外光をあててうまみ成分や脂肪の含量を測定する装置などユニークな製品を生み出して着実に売り上げを伸ばしている。また、太陽電池の性能を検査する装置を開発するなど、新たな事業へのチャレンジにも積極的だ。

相馬光学の自慢は、「製品の壊れにくさ」と「アナログへのこだわり」だと、代表取締役社長の明子氏は胸を張る。

「30年前につくられた当社製機器がメンテナンスで持ち込まれることも珍しくありません。お客さまから『相馬光学の製品は長持ちするね』と言われると、やはりうれしいですね。そろそろ装置の更新を…。なんてなかなか言えません。

アナログにこだわるのは、正確なデータ分析のためです。光分析されたデータをデジタル変換してしまうと、どうしても真

のデータが得られなくなることがあります。大学や企業などの研究機関では、正確なデータこそが何より大事。そうしたお客さまの期待に応えるには、アナログ信号での出力を貫くのが一番なのです。その結果、当社の測定機器は『30年壊れず、高い能力を発揮し続ける』という評価を勝ち取ることができ、リピーターを増やしているのではないのでしょうか(明子氏)

思い切った権限委譲で円滑な事業承継を実現

2013年、相馬光学の経営は創業者の信夫氏から、次女の明子氏に引き継がれた。信夫氏も明子氏も、事業承継はとてスムーズに進んだと振り返る。

「父は代替わりの数年前から次期社長は私だと内外に公言していましたが、私に直接伝えはしませんでした。おそらく、私が後を継ぐ決心をするまで待っていたのでしょう。そして、しびれを切らした私が『私が社長を引き受ける』と言い出したらすぐ、スパッと会長職に退いたのです。

経験豊かな父からすれば、未熟な私に意見したいことが何度もあったはずですが、私にすべてを委ね、陰で見守ってくれています。本当に私が迷ったときや、あぶない橋を渡りそうになっているときにだけ、手をさしのべてくれます。そこは後継

情報を集めて新事業に挑戦

[会社概要]

代表：代表取締役社長 浦 明子氏

業種：光学機器をはじめとする各種機器の開発・製造・販売

資本金：1000万円

従業員：24名（2019年3月現在）

所在地：東京都西多摩郡日の出町平井23-6

TEL：042-597-3256 FAX：042-597-3208

<http://www.somaopt.co.jp/>



商売の基本は人間関係

人と人とのつながりがビジネスの基本。口コミがきっかけで売上げが伸びることは多いです、食事会などでお客さまのニーズを聞いて製品開発のアイデアが浮かぶことも多々あります。



東京都の助成事業を利用するなど、外部の資金を上手に活用しながらものづくりを展開している



食肉脂質測定装置を使えば、牛肉に含まれる「オレイン酸」などを冷蔵庫内で測定できる



USBインターフェースを採用した小型・高速・高分解能の分光器も製造している

者にとって、本当にありがたい部分ですね」（明子氏）

「私は今でも技術屋のはしぐれ。ですから技術面で伝えたいことがある場合は、社長や社員にきちんと話をします。ただし、経営に関して自らの意見を押しつけることはしません。

私は『我以外、みな我が師』だと考えています。経営者は謙虚な姿勢で、いろいろな人の意見を取り入れるべきです。現社長がそのような姿勢を持っている限り、私があえて経営に口を出す必要はないと思うのです」（信夫氏）

あえて失敗を経験させ、若手を伸ばす

世代交代が進んでいるのは、経営層だけではない。創業当時からベテランが磨いてきた技術を次世代に引き継ぐことも、当社にとって重要なテーマの1つだ。

「ベテランが一方向的な教え方をすると、若手は反発しがちです。そこで当社では、ひとまず若手に自由なものづくりを体験させます。自力で挑戦し、実力不足で失敗すると、『先輩はやっぱりすごい』と納得できるもの。そのタイミングで技術を教え込むと、素直な姿勢で受け入れやすくなり、成長も早まるのです。

専門バカに陥るのを避けるため、若手に多彩な仕事を経験

させることも心がけています。社長交代後に開発部と製造部を統合して技術部を新設したのは、ものづくりの幅広い局面に携われる仕組みを提供することで、柔軟な発想を持つ人材を育てるのが目的でした」（明子氏）

明子氏は、信夫氏の「期を逃さぬため、常にポケットの中に情報をため込んでおけ」という言葉を大切にしている。

「自分の考えに凝り固まるのではなく、広くアンテナを張って情報を集めること。そして、フットワークよく動いていろいろな方から知恵をいただくこと。当社は今後も、そうした姿勢を大事にしていきたいと思っています。そして、いつまでも新たな分野に挑戦し続けられるよう、しっかり準備をしておきたいですね」（明子氏）

取材後記

「製品の壊れにくさ」と「アナログへのこだわり」に象徴される技術力と確かな品質、そして親子二代で築き上げた顧客との信頼関係が当社の躍進を支えていると感じました。公事業では助成金や新技術創出交流会など幅広く活用いただいております。新分野へ果敢に挑戦する当社を引き続き支援してまいります。

（多摩支社 鈴木倫孝）